

続・ 珈琲の思い出十九

はやる動悸を抑えながら、優子が帰りのバスに乗ると、間もなく携帯にメールの着信があった。

和樹からだった。

【件名】和樹です。【本文】「優子さん、僕のほうこそ、今日はありがとうございました。思い切ってお店に立ち寄ってみて良かった！もし良かったら、今度はお食事でも一緒にいかがですか？」

優子はすぐさま返信した。「ぜひ、よろこんで！」

もう迷いはなかった。

自宅に帰ると、子供たちが優子の母親と一緒に夕食のコロッケを食べ終わろうとしているところだった。

「ただいま、ごめんね、遅くなって。帰り際になって、ややこしいご注文のお客様がご来店されて・・・」

自分でも感心するほどすららと簡単に嘘がつけたことに優子は驚いていたが、優子の母親は優子の頬がいつもよりも上気していることに目ざとく気づいていた。

「どうしたの？優子、何かいいことでもあったのかい？」

「まさか！もう、困ったお客さんでくたびれ果てたわ！」

ああ、お母さんありがとう。美味しそうなコロッケ！」

夕食を片づけて、母親を見送り、子供たちを風呂に入らせると、優子もいそいで自分も風呂に入り、今夜も遅い夫が帰ってくる前に熟睡してしまおうとベッドに入った。(続く)